

当院における新厚生労働省基準（2005年）導入前後の正期産低出生体重児出生率の推移に関する検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本DOHaD研究会 公開日: 2018-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 雄一, 本田, 由佳, 小川, 淳子, 福田, 小百合, 竹中, 俊文, 池田, 申之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/3305

当院における新厚生労働省基準（2005 年）導入前後の
正期産低出生体重児出生率の推移に関する検討

佐藤雄一、本田由佳、小川淳子、福田小百合、竹中俊文、池田申之
産科婦人科館出張 佐藤病院

【背景】近年、本邦の低出生体重児の割合は 1970 年代、全体の 5.5%であったのが、2015 年には 9.5%に増加し、10 人に 1 人が低出生体重児になった。この背景には、女性の妊娠前からのやせ体型の増加も理由の一つと考えられる。最近のエピジェネティクスの研究が進み、胎児期の栄養状態が成育期、さらには成人期の健康に影響を受けるという DOHaD 仮説により、子宮内胎児の栄養状態の重要性が再認識されるようになってきている。今回我々は、胎児発育の視点から母体栄養状態を示す指標とした妊娠中の母体体重増加量基準と低出生体重児との関係を調査した。【方法】2000 年 1 月～2014 年 12 月まで、当院で正期産にて出産した 22,824 例（母体年齢； 31.7 ± 5.8 歳、分娩週数； 39.2 ± 1.1 週）を対象とした。低出生体重児出生率・平均出生体重について 14 年間の年次別推移と新厚生労働省基準（2005 年）を用いた栄養指導導入前後（非導入群（年度＜2008 年）、導入群（年度≥2008 年）での比較検討を行った。【結果】1) 低出生体重児出生率は 2000 年 68/1,353(5.0%) が、2004 年 106/1,547(6.9%)と有意に増加したが、2014 年の低出生体重児出生率 57/1,254(4.5%)と 2004 年に比較し有意に減少した($P < 0.01$)。2) 低出生体重児出生率は非導入群 768/12,345(6.2%)、導入群 552/10,478(5.3%)と導入群で有意に低く($P < 0.05$)、出生体重は非導入群 $3,048.7 \pm 380.9$ g、導入群 $3,065.7 \pm 363.9$ g と導入群で有意に高かった($P < 0.01$)。【結語】出生体重には妊娠中の体重増加量と栄養指導が影響していた。DOHaD 仮説の視点より、低出生体重児予防を考慮した体重管理と栄養指導の重要性が示唆された。